

臨春閣

数寄屋風書院のみどころ

臨春閣は「数寄屋風書院」とされ、「書院」としての格式と定型を持ちながら、「数寄」すなわちデザインや素材に「好み」を盛りこんでいる建築様式です。品がありながらも遊び心が盛りこまれた、オシャレな空間となっています。

真

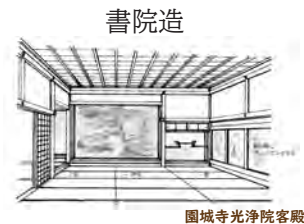
行

草

格式ある表向きの様式

↑ 中間 ↓

くずした風雅な様式



数寄屋風書院造



数寄屋造／茶室



竹の皮の戸 / 桐の柱目の戸

階段下の物入れの扉、上部は竹の皮を用いた戸、下部は桐の柱目板を鏡板として用いた戸。数寄屋らしい奇をてらった素材・押さえた色味の朱漆框、取っ手のデザインも良く見るととてもオシャレで繊細。

花頭型の階段入口

禅宗建築で用いられる「花頭窓」の形をデザインとして流用。黒漆框の入口を通り抜けると、近世建築にしてはゆったりとした幅と傾斜の階段が。朱漆の手すりも繊細。

板絵十二支図額

僧形や狩衣、十二単など時代装束をまとった十二支が杉の板に描かれています。順序に謎アリ。

欄間の楽器

雅楽で用いられる実際の楽器が収められています。床の間側から龍笛・高麗笛・箏・笙。

立涌文欄間障子

縦の波のような模様は、板を切り出して作ったもの。精緻に組まれた組子は卓越した木工の技の賜物、伝統デザインながらモダンな雰囲気。

海老虹梁

禅宗建築で用いられるデザイン。上段との境に用いられ、結界の役割を持つものか。

黒柿の框

上段構えを構成する象徴的な框。日本建築は床の高さの違いが位を象徴します。柿の木でも「黒」になるのは珍しく、ましてやこれほどの大きな材、高級珍木です。

菊・桐の欄間

金や銀で雲や龍が描かれた色紙が、梨地黒漆の額に納められ、桐・菊の繊細な透かし彫り彫刻で支えられています。菊の欄間に収められているのは浪華の景勝地の景色を詠った「浪華十詠」。菊・桐の透かし彫りの彫刻は潇洒なデザインも見所ですが、厚さが極めて薄い繊細さも特徴。

黒漆螺鈿楼閣人物図屏

舶来の品、三溪はこれを豊臣秀吉ゆかりの物と考えていたのかも。天袋の戸も裂や引手金具が秀逸。

卍崩しの天井

棹縁天井を風車のように方向違いにかみ合わせた大胆なデザイン。

波の欄間

かつては銀等の色彩が施されていたとされますが、経年で黒ずんでしまっています。松や波に、僅かに緑や青の色彩が確認できます。

蓮の茎の戸

朱漆の框に挟まれ整然と並んでいるのは、乾燥させた蓮の茎。材料には三溪園の蓮池の物を使用。

